

昭和50年 ～ 54年

1975～1979



昭和50年、自然保護のため閉鎖となった松山営林署面河製品事業所

ボクらが育てたマス出荷

面河中、シーズンオフのプール有効利用

面河中学校（岡田時晴校長、九十二人）では、二年前から学校プールを利用しマスの養殖を続けており、今年もプール開き（七月十日）を前に、体長二十五センチに成長したマスの出荷を始めた。

同校では、夏季の二時期しか使われないプールをなんとか有効に使えないものかと案を練っていたが、二年前から「同村の地場産業であるマスを養殖し、地域とのつながりを深めるとともに、生徒に郷土愛を持たそう」と計画。初年度はプールの使用が終わる二昨年の九月初めに、約五千匹のマスの稚魚を放流した。（昭和51年6月23日）



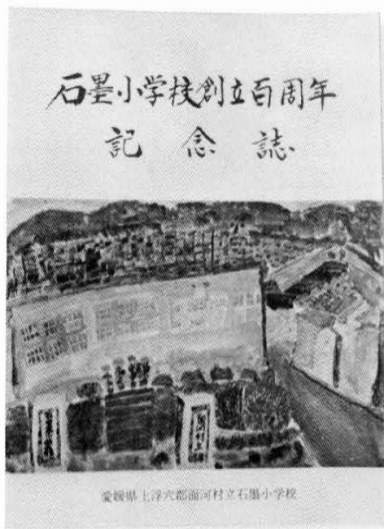
プール内でマスを養殖、自主的に管理する面河中学生

開校100周年祝う

面河村石墨小 記念誌も刊行し配布

石墨小学校（浅川主水校長、児童数二十七人）が今年で開校百周年を迎え、このほど、父兄、村関係者、歴代校長、児童など百五十人が出席し、同校で百周年記念式典を行った。また同校の浅川校長、渡部満教頭らが中心になって百年の学校史をまとめた『百周年記念誌』も同時に刊行され、関係者に配布された。

同地区は過疎現象が進んでいるが、学校のつながりは深く、地区の文化のよりどころとなっている。今回の百周年行事も住民一丸となつて運営され、地区といっしょに歩んできた同校百年の歩みをそれぞれの感情で受け止めていた。（昭和51年11月27日）



発行された記念誌。同校に残る沿革史をもとに「発展の歩み」をしるしたほか、明治43年ころからの卒業生写真、名簿、歴代校長、村関係者などの祝辞を盛り込み、次の100周年への飛躍台にしている。

できたぞミニ面河村

故郷の地形ひと目、石墨小卒業生が立体模型図

石墨小学校（浅川主水校長、児童数二十七人）の卒業生五人が、卒業記念に面河村の立体模型図（二万五千分の二）を作り、卒業式当日、父兄、在校生らに披露、教材として残すことにした。

石墨小は洪草から十八ヶ離れた標高七二〇メートルの山間地にあり、かつては児童数百五十人を超えたこともあるが、近年は過疎のため年々減少。六年間で半数になった。このため、担任の平松義樹教諭は「卒業後バラバラになる児童の思い出と、卒業しても古里・面河を忘れないように」と、児童と話し合いの結果、今年二月から立体模型地図作りを計画した。模型地図は五十センチ四方で、馬糞紙と紙粘土を使い、標高に合わせて二枚一枚積み重ねていく手の込んだ作業。毎日、放課後二時間ほどかけ、二カ月余りで製作した力作。（昭和52年3月28日）



卒業製作の立体模型地図を囲む石墨小卒業生ら

山の子のトレシャツ

人気を呼び全校で使用

体の臭い子供たち。なぜにおうのか。干田尾、平松両教諭は二人一人についてその生活実態を調べてみた。風呂に二週間以上入っていない子がいる。汚れて黄色くなつたパンツの重ね着をしている子もいる。顔を洗わなかったり、歯を磨かない者、歯ブラシさえ持っていない者がいることが分かった。

だが、両親のほとんどは零細農家で、生活のため一年のほとんどを朝早くから土木作業に出かけ、子供にかかわりきれないという実情。「なら、私たちが代わつて……」両教諭はそう決心した。五十一年十一月のことだ。

体育の時間に汗ふきタオルを用意させていたが、ほとんどの子供は二週間も洗わないままで置きつ放し。まず、その洗濯を習慣づけることから手をつけよう。また冬にはよく厚着をし、風邪で欠席する子が多いから、薄着に慣れさせよう。二人の意見は一致した。

こうして考え出されたのが、タオルで作ったトレーニングシャツ。しかし、誰がそのタオルシャツを作るか。両親がそろつて多忙とあれば、その役目は教師しかなかった。そこで子供たちにタオルを一枚ずつ持つて来させ、毎日のように二人で夜なべ仕事のミシンを踏んだ。タオルの両端を縫い合わせて、肩ひも、脇ひもをつけ、両脇を縛るゼッケンタイプ。「石墨トレシャツ」の誕生である。

「ありや、しまった」。平松先生の悲鳴に目を向けた干田尾先生は「あれ、まあ」と、思わず吹き出した。首を通す部分まで縫ってしまったら

はないか。「ぼくは男だし、ミシンは小学生時代、家庭科の時間にちよつと習っただけ。見よう見まねで結局失敗。それからは裁断は僕が、縫うほうは干田尾先生が……」というエピソードもあった。

こうして出来上がったタオルのトレシャツは、翌五十二年四月、新学期が始まると同時に、三年生以上の上級生に配られた。二カ月間様子をみて効果を判断しなかったからだ。ところが、このトレシャツは子供たちに大人気。二週間もたたないうちに、二年生の母親たちが見よう見まねで各家庭で作り、そろつて着るようになった。低学年の子も、上級生に交じつて洗濯もする。こうなつては全校使用だ。

体育の授業前の着替えで、素肌タオルシャツ、その上に体操着を着る。準備運動が終わると体操服を脱ぎ、タオルシャツだけになる。授業が終わると、タオルシャツで全身の汗をぬぐい、各自が洗面器で洗濯、そして校庭に張つたロープに干す。天気がよければ、下校するまでに乾いている。

初めのころはそれだけだった。が、ひと月もすると靴下や運動靴も、自分で洗うようになり、さらに体育以外の集会活動などの時にもタオルシャツをせがむようになってきた。汗をかいた後が、先生と子供たちとの心の触れ合い、裸の付き合いを深めるまたとない楽しい場となる。

(昭和54年6月6日)



タオルの「石墨トレシャツ」で業間体操も全校生がそろって(右側が森校長)

天神緑の少年隊員

信条を看板に

上浮穴郡面河村、天神緑の少年隊Ⅱ隊長・正岡久典君、面河中二年、三十九人Ⅱは五月十九日、隊の信条を書いた看板を同村洪草、みんなの広場に立て、隊員の活動を誓い合った。

同少年隊は今年一月に結成され、これまでも村内に記念植樹などを実施してきた。今回の看板は、自然を愛し住みよい郷土づくり、勇気と情熱をもって責任ある行動——など五項目の信条を列記している。

同村内には石鍾山、面河溪など自然に恵まれた名勝地を抱えるが、近年増え続ける行楽客などで自然が少なくなってきた。同隊では、今後村内の緑を守るパトロールを強化することになっている。

(昭和54年5月22日)



隊員たちの手で立てられた「緑の少年隊信条」

石仏・石碑から村の歴史知る

面河中の「郷土クラブ」

草に覆われた山道に眠る石仏・石碑を訪ね歩き、風雪で薄れかけた文字の中に、故郷の昔の生活を知ろうという地道でユニークな調査が、面河中学校「郷土クラブ」の手で進められている。これまでの調査で、絶えて久しい面河新四国の輪郭が浮かび上がるなど、忘れ去られがちな故郷に生きた先人の生活史の一端を埋める成果が出ている。

郷土クラブは、自分たちが住む村の歴史を見つめ直すことで故郷の風土を確かめようと、高岡貴彦君Ⅱ三年Ⅱを中心に三人で、昨年つくられたばかり。石仏・石碑の分布、設置年月日などを研究テーマに、調査を続けている。

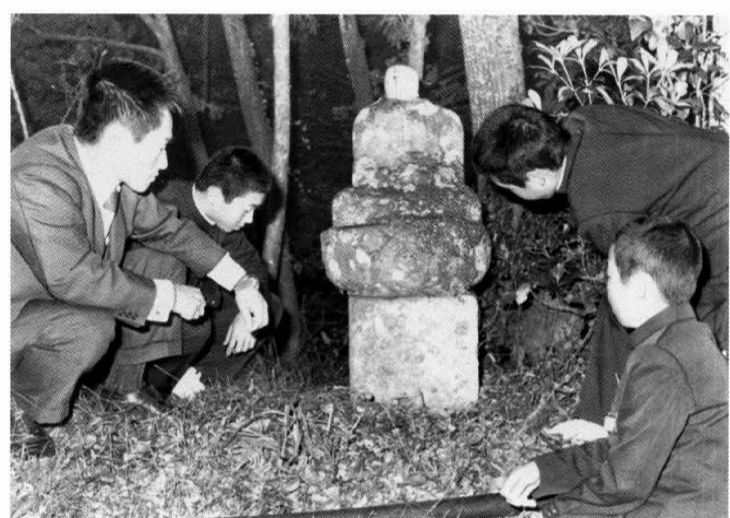
調査は、古田隆教諭の指導で、週二時間のクラブ活動や、春、夏の休みを利用、全村内を歩き回ることから始まった。昔の生活道も、今は利用する人もなく、獣道同然になった山道まで分け入り、詳細に写真に撮り、判読が難しい文字は拓本をつくっていった。二年間の調査で、江戸時代の石仏八体、石碑など十体、合計十八体の確認が終わった。

これまでの調査で、村内で一番古い石仏は、明和九(一七七七)二年、直瀬村(現久万町)条七、竹七の銘のある地藏菩薩Ⅱ洪草、村役場入り口Ⅱであることが分かった。また文政十二(一八二八)年、父之川村(現久万町父野川)梅蔵銘のある石仏が通仙橋、若山、成、昼野、栃原に五体も集中して設置されているという事実も判明した。さらにクラブ員たちは、大正十三年に始まり、現在は絶え

てしまった面河新四国の全容をつかむまでにあと一步と迫った。残る八カ所の所在を確認できれば、ほぼ再現できるまでにこぎつけた。

現在村では、村史を編纂中だが、石仏・石碑などの史跡関係はほとんど調べが進んでおらず、その面でも、クラブ員たちの調査は空白を埋める貴重な研究・資料になりそうだ。

(昭和54年11月8日)



古田先生(左手前)の指導で、村で一番古い石仏を調べるクラブ員たち

本番さながら婦人模擬議会

今年は国際婦人年。婦人の地位向上を目指して、都市では多彩な催しや運動が繰り広げられている。人口千八百人余りの山村、上浮穴郡面河村でも女性の政治意識を高めようと九月二十三日、婦人模擬議会が開かれた。村長以下理事者側も全員出席、鋭い質問を浴びせながら村行政について勉強した。「家庭婦人はとかく政治に疎い」と言われがちにだけに、新しい試みとして注目される。

会場の同村役場二階会議室は、村議会と全く同じ。中川鬼子太郎村長ら三役、各課長も本番そっくりの体制。議員は定数を四人オーバーの十六人。今回の婦人議会開催は、婦人側の要望に村、議会が全面的に協力した形。行政の浸透は、多数を占める地域婦人の積極的な取り組みが大きな鍵を握っており、今後も続ける方針。

(昭和50年9月26日)



「村政を身近なものに」と開かれた婦人模擬議会

スモモの里目指す

新品種、果実10センチ

上浮穴郡面河村では二年前から山間地農業の打開策として新品種導入の検討を重ねていたが、新品種のスモモに決定し、このほど、接ぎ木の仮植えを終えた。このスモモは「大石プラム」と呼ばれ、これまで全国に二カ所植樹されているだけ。四、五年先の収穫期には、果実が直径十センチにもなるといわれ、村民の期待も大きい。

今回仮植えされたのは、同村柚野地区の農家十二戸で、接ぎ木は高さ二メートルのものが約二百七十本。農家では、すでに本植え用の土地約二ヘクタールを確保しており、同村では四、五年先には十センチまで広げ、村の基幹作物にしたいという構想も組んでいる。

(昭和51年4月21日)



山間地農業振興の期待を担って植樹された新品種のスモモの接ぎ木(面河村市口で)

過疎地に咲いたリンドウの花

上浮穴郡面河村笠方割石地区。過酷な条件に幾度となく泣いた開拓農家のUターン青年が、「リンドウの花」に将来の夢をかけ、新しい高冷地農業に挑んでいる。

この人は、篠原栄男さん(三二)。東予地方でサラリーマン生活をしてきた栄男さんが、自分の人生を農業にかけると決心したのは二年前。父親らの苦勞を目のあたりにしていた栄男さんが目をつけたのは、高冷地を逆に利用することだった。久万農業改良普及所にも通い、栽培品目に「リンドウ」を選んだ。「やるからには勉強を」と、熊本県阿蘇郡へ二年間の研修に行き、必死で栽培技術を習得した。昨年帰村した篠原さんは、早速休耕地十ヘクタールを借り栽培に取り組んだ。朝五時に起き、管理に細心の注意を払う苦勞もあつたが、出荷先の松山市場の人気も上々。面河村では、篠原さんの花卉栽培にかける情熱に刺激され、仲間の輪が広がり始めている。

(昭和54年9月15日)



リンドウの出荷に喜びをかみしめる篠原さん

30年の軌跡第一部

開拓地はいまシリーズ⑤ 面河村河の子

「意識」はね返そうと生きる

去年の盆に、ブラジルから峰本留吉さん^(五)が十四年ぶりに、上浮穴郡面河村河の子にひょうこり里帰りした。留さんは、いま河の子に残っている人たちと戦後の開拓に励んだのだが、うち続く台風にもかもたたかれ、県や村の離農の勧めもあり、三十五年に五世帯の一員としてブラジルへ移住した。永年見なかった留さんの顔は、想像以上に老いていた——と河の子の人たちは思った。十四年も経ていけば当然だろうが、留さんの老いた顔から、やはりブラジル開拓は苦勞したんぞよ——と河の子の人たちは彼の過去を想像した。自分たちが開拓地・河の子に残った方がよかったか、開拓移住したほうがよかったか——留さんの顔を見て感じるところがなかった、といえはうそだろう。

留さんは、今では河の子を「何と狭い世界よ」と感じたかもしれない。面河溪行きの観光バスが、ちらつと横目で通り過ぎるような、脇道にそれた山の奥。車でもないしと外界と日常生活を保てない孤立した集落。その開拓村は、今なお営々と林業と養蚕で生きている。

それに比べてブラジル話は大きかった。とりわけ大豆の種を大地に七トも落とした話に、河の子の人々は驚いた。移住後、十年は苦勞したというが、今では使用人もいて、何百畝もの土地に大豆やコーヒ、養蚕に米づくりもやっているとか。留さんは、さらにブラジルへ帰りがけに「なんなら、

行きたい人間がおつたら連れていくぜ」と皆に声を掛けた。でも、家をたたんで行こうかという人は出なかった。

残った人に将来の不安がないではない。開拓の最初から、あれこれやった結果の養蚕も、桑畑の地味はやせていくし、肥料代は高騰する。だが、財産ともいえる山林が育っている。残っている者といえば、四十代以上で、いまさら一から出直す馬力はない。若い者は外へ出てしまった。それぞれの頭の中で、留さんの老いた顔と話は半分として聞きおくだけであった。

同じ河の子で開拓をし始め、もう一つ別の生き方をしている人たちがいる。四十年代前半に松山など都市へ出た七世帯だ。河の子での苦勞続きに、先は見えたとして積極的に村を出た人もいたし、残りたかったのに、小学校の合併で、泣く泣く子の教育のために出た人もいた。郡内の松山移住ブームに乗った人もいた。

河の子に残った二人、中西鶴吉さん^(六)は「どこへ行っても安楽はできんと思うて残りました。若い者でも、残ろうと思うた人間もおるのです。それが徴兵検査よりひどい引っぱりようで、就職口があるからと引っぱっていきよったのです。残ろうと思つた者も、友達がないので寂しくて、仕方なく出たのですよ」という。

河の子に残った男で二番目に若い日野清見さん^(四)は、残れた理由をこう説明する。子供が比較的大きくなって、学校統合にも対処しやすかったのと、ブラジル移住組が出ていったあとの残地を、勇気もなく村へ渡ってしまった失敗を二度と繰り返すまいと、松山移住組の残地は、無理は

覚悟のうえで残った者が入手した。それが今日の食える所有面積になった。

残った者は残されたという意識を跳ね返そうと生きている。外へ出た者は、落後者という意識をはね返そうと生きている。そういう心理がのぞけた。
(昭和50年7月16日)



過剰入植で出た人も、残った人もいた河の子の集落

職員、家族ら50人離村へ

閉鎖される面河製品事業所

県内の山岳観光のメッカ石鍾山系で二十一年間にわたり国有林の伐採を行なってきた松山営林署面河製品事業所が近く閉鎖される。閉鎖に伴いこの付近帯での伐採はすべて中止され、四季を彩る雄大な自然景観が保存されることになった。

松山営林署管内で国有林の伐採を担当する製品事業所は、上浮穴郡面河村大味川の面河事業所と同郡小田町の小田事業所の二カ所。このうち面河では、名勝面河渓を中心に石鍾山系約四千鈔を対象に、年間六千―七千立方メートルを伐採、搬出していた。同事務所は残務整理後、分離独立した小田事業所と再び合体することになる。

(昭和50年3月16日)



ついに閉鎖されることになった松山営林署面河製品事業所

「お知らせ」を全村同時に

進む広報無線施設工事

上浮穴郡面河村では、村内全域同時に広報放送ができる郡内で初めての「広報無線施設」工事を進めている。山間に点在する集落への広報連絡は、とかく手間が掛かるうえ、連絡もれなどの懸念があつたが、無線方式を採用すればこれらの心配も解消され、特に災害時緊急連絡に、その威力を発揮する。

同村の広報連絡は、十年ほど前は有線方式で放送されていたが、故障や災害などで、現在有線施設が活用されているのは洪草、本組、柏の木の三集落のみ。他の集落は、村の委託員による文書の回覧方式が行われている。無線方式の運用が始まれば、行政連絡のスピード化、周知徹底が図られ、特に災害発生時の緊急連絡に役立つと村民からの期待も大きい。

(昭和54年8月8日)



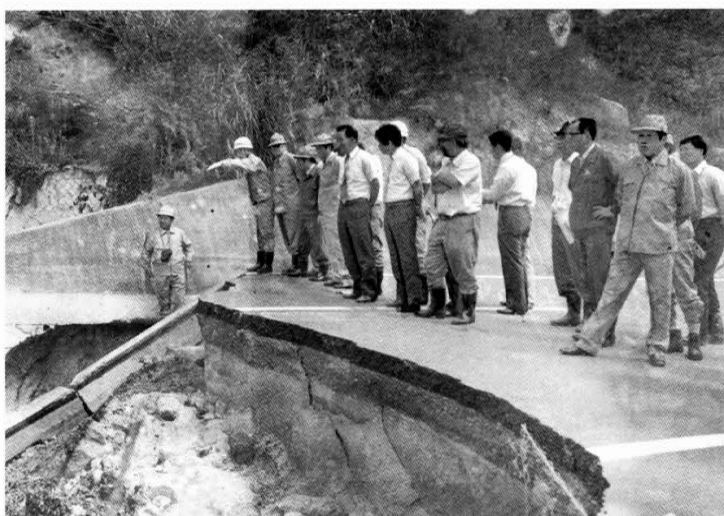
村役場屋上に設置された親局のアンテナ

続く地割れおののく住民

大成の18世帯半孤立

上浮穴郡面河村大成地区の村道大成線(併用村道)が台風17号のため徐々に地割れを起こし、九月二十二日現在、道路決壊、地崩れ箇所は五十二カ所、被害総額三億五千万円にのぼっている。また同村道は大成地区十八世帯五十六人の唯一の生活道路でもあり、地区民は生活物資の運び入れもすべて人力に頼り、今後の雨量によっては崩れる危険もあり、不安な毎日を送っている。

(昭和51年9月23日)



道路をふさぎ河川に流れ込む土砂の山を前に対策を練る村長ら

こんにちは面河村 第59回移動編集局

イノシシ狩り20年

菅茂盛さん(五三) 若山君はイノシシ狩り歴二十年のベテラン、猟の方法が変わっている。

普通のイノシシ狩りは、「待ち」という方法。つまりイノシシのよく通る道(「通り」または「通い」という)で待ち伏せし、鉄砲でズドンという仕掛け。これに対し菅さんは、イノシシに出くわすと猟犬三匹を一齐にからせ、シシが弱ってきたところをライフル銃かナタで心臓をひと突きし、とどめを刺すというやり方。

猟犬の名はテツ(オス、六歳)、親グロ(メス、五歳)、子グロ(オス、四歳)、三匹ともイノシシ狩り専門の洋犬種。イノシシめがけて三匹が一齐に飛び掛かるのだが、各犬のかみつく場所は必ず決まっている。テツはイノシシの耳の後ろの急所、親グロは右足、子グロは鼻を攻める。さすがイノシシ専門の犬だけあって、どんな大きなイノシシでもひるまず飛び掛るという。しかし手負いのイノシシは死に物狂いで抵抗する。猟犬を食わえて振りとはし、二本の鋭い牙でバツサリやる。テツは五十一年に頭を切られ、皮がはげるほどの傷を負った。「傷のない犬はいませんね。先代の犬も足やられました」と菅さん。

(昭和53年4月14日)

村自慢・住民センター

村の自慢の一つに村役場新庁舎横の住民センター(高岡幸盛所長)がある。昨年十月にできたばかりのデラックスな建物。村内七地区にある公民館の中央公民館的な役割を担い、青年団、婦人会、老人クラブなどの会合の場に幅広く利用されている。この種の建物としては県下で四番目。これまで全村民が集える場所がなかっただけに、センターの完成で大人数の会合がすぐ開け、各団体の活動が活発になった、と村民の間で好評。三月二十七日にはセンター内の結婚式場で第二号のカップルが誕生した。

(昭和53年4月14日)



住民センターは村民の憩いの場

山作物の種を残す

昔からのモノや行為を残すことを民俗、文化財保護というが、面河村には、昔から山でつくってきた作物の種を、細々ながら長々と残しておこうとしている人がいる。相の木集落に住む遠藤太次馬さん(九二)は、約二十年前から、自分の家だけでなく、損得を離れて、ただ種を採るだけのためにいろいろな作物を育てている。

遠藤さんが種残しを思い立ったのは、世の中が著しく変化しだして、山の人たちは自分たちが昔から育ててきた作物をどんどん見捨ててきたから。いつでも、よそから種が手に入る安易さからだったが、遠藤さんは別の考え方をした。

「山で採っていた作物は、いつまた作らんといかんかもしれん。種さえ採っておけば、いつかは役に立つ」と遠藤さん。それぞれの種には、生活の思い出がある。白い実のモチトウモロコシは、ご飯になった。赤トウモロコシは、医者役目をすると言いつけられ、普通のトウモロコシ畑に二本でも植えておけば、全体に虫がつかないと言われた。二口と呼ぶ粒の黒い豆は、明治後期に山から姿を消してしまつた。ゴイシと呼んで、黄色の実の中に濃い茶色まじりのトウモロコシもなくなった。遠藤さんの、義農作兵衛のような現在の気持ちが見失われると、やがて赤トウモロコシも山から全く姿を消すに違いない。

(昭和53年4月15日)

庭石の採石阻む

面河村渡草に住む旅館業、中川正直さん(六三)と、若山に住む林業、菅祐直さん(五三)は、村会議員であり、昭和四十九年九月から村の自然保護委員。五十二年六月からは環境庁から任命された自然公園指導員でもあり、何かと村内の自然保護に関心が強いし、自ら意見を述べる機会も多い。

国定公園面河・石鎚山を控える同村では、高度成長期のさなかの四十五年にスカイラインが土小屋まで開通し、その工事をめぐって自然破壊論議が起きたし、登山観光ブームでごみ公害が起きた。園芸ブームや庭石ブームで、山の植物や石が村外にどつと持ち出された。

村内でも自然保護思想が具体的な展開を示すのは、四十八年十二月末の面河村自然保護条例の制定から。「村の自然環境を保護し、その適正なる利用開発を推進するとともに——」で始まる同条例は、いわば村の自然保護に関する憲法である。中身に五人以内の自然保護委員会の設置、自然環境保護地域の指定、監視員の設置、罰則の規定を盛り込んだ。

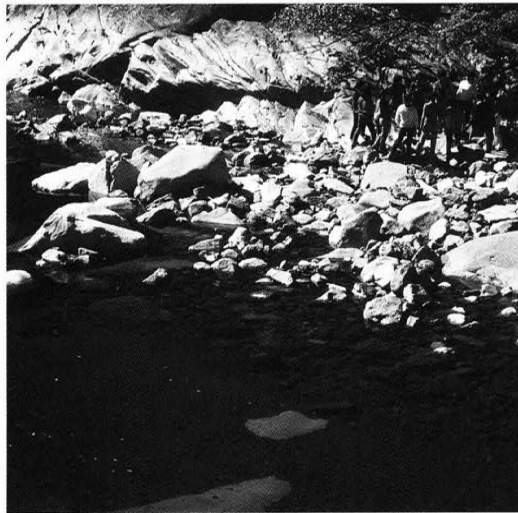
スカイラインの延長計画が一時凍結になった直後の四十九年八月、面河村は県下のトップを切って「自然保護の村宣言」をし、直ちに自然保護条例に従って、中川さんや菅さんらを自然保護委員に任命し、事例を村長に具申する役割を同委員たちに求めた。

この四年間、村全体で取り組んだ自然保護の成果は幾つかある。委員たちがかかわったもの

中に、台風災害後の面河溪谷復旧に道路の路肩や土止めの工事をする際、ブロックが使われようとしたのを、自然景観の厳守を訴えて、そこにあった石で野面積みに変更させたことがある。

自然保護委員が当初から頭を悩ませたものに、庭石ブームの中で採石をどう規制するか、があつた。河川法で食い止められるものの考え方にも沿つて、公共にかかわる以外の一切の石私有地も含めて、を村外に出さない考えを打ち出し、村民も今日までそれを厳守してきた。

(昭和53年4月15日)



昭和46年ころの面河溪紅葉河原

吟詠グループ「吟鎚会」

村内には八十人の会員数を誇る吟詠の「吟鎚会」(光田友義会長)が活躍している。発足してもう十二年になる。ただ単に「好きものが集まった趣味グループでないところに、吟鎚会の特徴がある。初代会長の竹田昇さん(五八)によると「過疎を食い止めよう」という願いの込められた会だといふ。

発足当時、面河ダム建設工事に従事していた村民たちが、工事の完成とともに次々と村を去つていったが、人々が村を去るのは「趣味、娯楽が足りないのも「因」と関係者が奔走して会の設立にこぎ着けたといふ。

そもそもは、面河郵便局に勤めていた中川和広さん(現在三津浜局)ら二、三人で「舌をかみ、笑いをこらえながら練習していた」そうだ。このグループはいったん解散したあと、再び中川さんや当時の駐在さん、高須賀虎一さんらが奔走し、十二、三人のメンバーで吟鎚会として発足、次第に会員が増え、三月上旬の発表会では七十五人が自漫のノドを披露する盛会ぶり。

会員は子供から老人まで、職業も公務員、商店主、主婦、農業、労働者と幅広い。高須賀翠溪さん(五三)ら四人の指揮陣を中心とする八十人の会員は毎週一回、九会場夜間練習を行っている。出席率は平均、八〇%以上というからスゴイ。

(昭和53年4月16日)

※昭和53年4月14・15・16日掲載分から抜粋

「過疎地の足」確保を

「血圧が高くて、精密検査を受けに松山まで出ようとしても、朝七時の便が一つあるだけ。しかも途中、乗り換えのための待ち時間が三十、四十分。そこは川原の冷たい所だね。元気な人だつてしびれてしまいますよ」。上浮穴郡面河村笠方のダム近くに住む主婦、渡部秀子さん(五)。「帰りの便は早く、二時前に久万まで帰っていなければ直通便がありません。間にも拍子にも合いませんのよ、バスは」。

「夫はタクシーを使えというけれど、村役場のある洪草へ出るだけで千三百円。もつたいなくて、よう乗らんようになりました。交通問題さえ解決されると、ここほど住みよい所はないと思うんですがね」ともいう渡部さんは、過疎地でこそ、庶民の足となる乗り合いバスは「公共輸送機関」として走ってほしいと訴える。

ところが同郡小田町の南山と立石地区で、昨年夏から運休されたように、いわゆる「過疎バス」は、経済面から不採算路線とされ、切り捨てられていく。「確かに乗る人は少なかったろう。しかし、バスが走っている所へ出るまでに二時間も歩かなければならなくなつて、二層過疎化を感じる」というのは小田町農協専務で南山に住む門田潔さん(五)。

「生活路線だけは確保していく」(白方清春伊予鉄久万営業所長)というが、経営難のバス事業にとつて、最大の方策は合理化だという。ワンマンバス化もその二つだが道路条件の制約もあって、山間部ではままならず、車掌業務は欠かせない存在となる。

上浮穴高校二年生、石田茂子さん(七)は、登下校するバスの車掌さんを務める。「地元『足』を確保する代表選手だなんていわれ、車掌業務を頼まれた時はびっくりしました。でも私は、将来も地元に住むつもり。バスがなくなつては困りますから」と、過疎バス切り捨てへの歯止めとして、バス合理化の二役を担っている。こうして確保したバス路線が同郡内に三つ。車掌業務協力者という名の高校生が六人いる。

バス会社としても、赤字路線を多く抱えているところほど経営は苦しい。公共性の強い企業として、最低限度の運行は半ば義務づけられているかたち。経営難を理由に路線を廃止するには運輸省の認可が必要。

そういった性格から、バス会社にしてみれば「赤字補てんのため国、県の補助制度を確立してほしい」(「気持ちは強い。だが、一方には「経営努力をもつとシビアに」との注文もあり、県内三私鉄の相関関係などの面で、県行政の指導のあり方が、ますます注目されそうだ。)

(昭和50年1月5日)



バス事業者にとっては不採算路線も、過疎地住民にとっては「唯一の足」であり生活路線(上浮穴郡面河村笠方で)

面河ダムで地区は過疎

笠方の面河ダムが豊かな青い水をたたえる湖のすぐ北側に市口という集落がある。農業を営む伊藤進さん(五)は美しい湖を見るたびに、ある「ひとつのこと」が脳裏を去来する。それは九人の弟たちが将来「古里」を失うかもしれないということだ。それを思うと「なんとも忍びない気持ちになる」という。

伊藤さんは後継ぎに「縷の望みを託しつつも」これまで自分がなめて来た同じ苦労を味わわせたくない」という複雑な心境でいる。しかしながら、伊藤さんが豊かな明日の農業を胸に描きつつ、珍しいプラム(アンスの一種)栽培に仲間たちと乗り出したのも「経済的な裏付けさえあれば、娘婿が定年後にでも継いでくれるかもしれない」と希望を捨てていないためらしい。

面河は過疎に悩む代表的な町村の一つ。昭和二十五年に五千人いた人口が、今では千六百六十二人。ひとつの三分の一だ。なかでも笠方地区の人口減は激しい。三十八年に完成した面河ダムで八十四世帯(三百八十人)が立ち退いたことが過疎に拍車をかけた。

市口の隣、梅ヶ市の集落でも、ここ四五年の間に民家が半減し十戸になった。廃屋が軒を連ねる地区だ。今春、末娘を松山に就職させた農業、黒田清隆さん(五)は夫婦二人暮らし。六十歳の田畑で米作や養蚕を行うかたわら、山林の伐採や下草刈りの現金収入を得て生計を立てている。「ダムで村が寂れたのが過疎のもとよ。地区の中心部が沈んでもうて、手と足が残ったよう

なもの」と黒田さん。

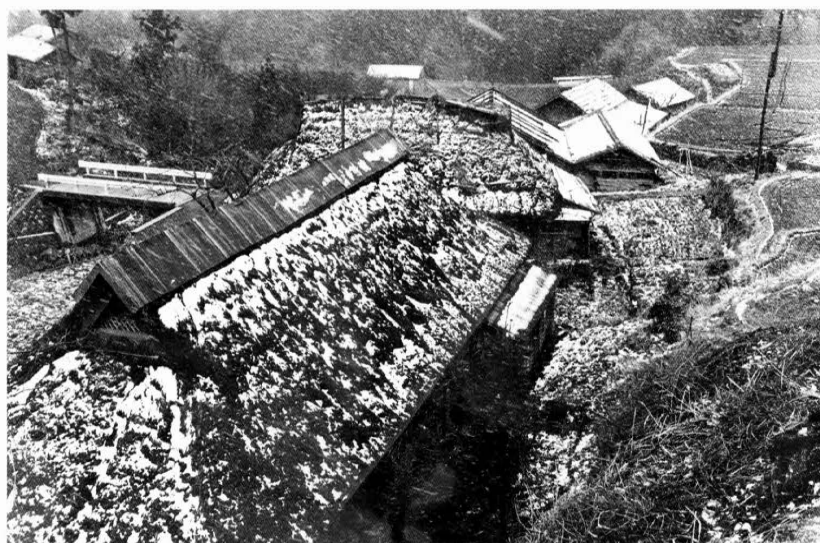
「もうこれ以上、人の減りようがない」という声を耳にした。そうだろうか。梅ヶ市にしても市口にしても小学校に通う児童は今やゼロ。住民の平均年齢の高さが想像できる。後継者が戻らないまま過疎が一段と進む可能性がある。

村では各種産業の振興で過疎を防止しようと懸命。笠方地区には面河ダムの湖を利用した観光開発も考えられているが、地区の人々は雪が深く冬場に現金収入の得られる仕事が少ないため、「とにかく仕事が欲しい」という。

「ここに産業を興すより市口から川内町まで黒森峠に二、三キロのトンネルを抜いてほしい」と訴えるのは小網に住む高橋鹿太郎さん(四)。「そうすりゃ、雪があつても松山へ出稼ぎに出られ、人が減らなくなる。医療も、教育も、いろんな問題が一挙に解決する」と言い、「仕事さえあれば、ここに住みたいと誰もが思うところのよ。空気はきれいし静かで、ええところじゃろうがな」としみじみ。

電力をおこし、道前道後の平野を潤した一方で、笠方に激しい過疎をもたらした面河ダム。住民は今、ダムを疎んじながら古里を守るのに身の細い思いをしているようだった。

(昭和53年4月16日)



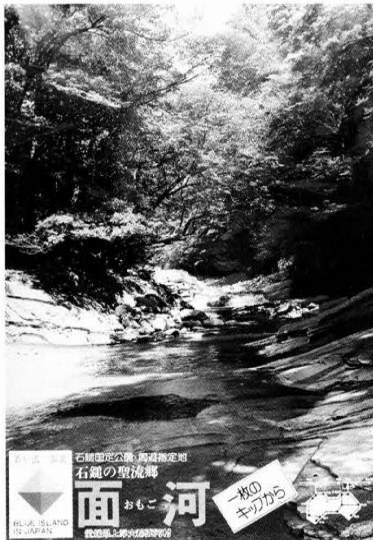
春雪の中、ひっそりとたたずむ廃屋(笠方地区)

名勝・面河溪PR

上浮穴郡面河村は夏の観光シーズンを迎え、名勝・面河溪を広く紹介する観光ポスター千五百枚を作り、県内外に配布することになっている。ポスターは面河溪の一角・蓬萊溪の初夏をとらえたもので、写真は全日本写真連盟関西本部委員の安藤喜多夫さん。大きさはB全紙で、清流に映した木々の緑がすがすがしさを醸している。

同村への観光客は山岳観光の脚光とともに年々増加し、昨年同村を訪れた観光客は七十三万人。そのうち県外客が七割を占め、同村では東京、大阪の国鉄を中心に県内外の観光案内所に送付し、面河溪をPRすることになっている。

(昭和53年6月15日)



県内外に配布された面河溪観光ポスター

釣り糸のどか コイのシーズン

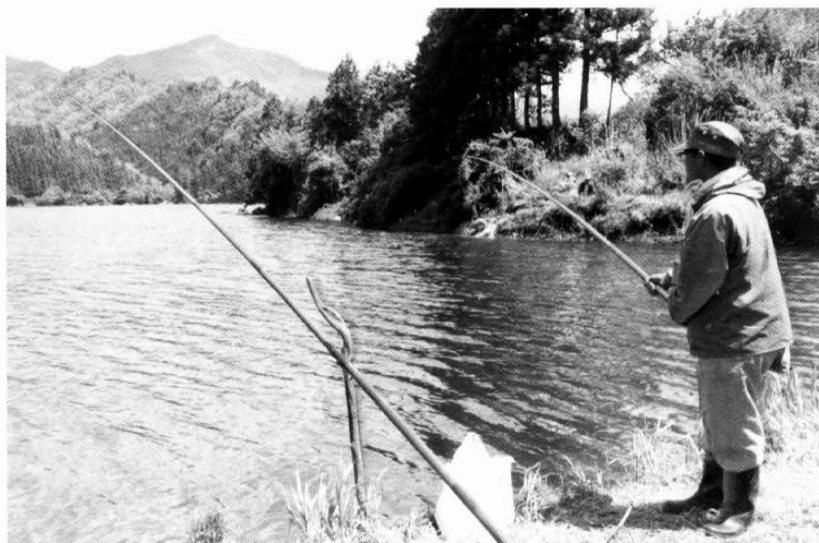
大物どっさり面河ダム

新緑がもえるような山境に囲まれ、満々と水をたたえた上浮穴郡面河村笠方の面河ダム。湖畔では、コイ釣りのシーズンに入り、土、日曜日ともなれば松山地方からの釣り人でにぎわっている。

同ダムは、コイのほか、四十八年面河川漁協が放流したニジマス、フナなどの宝庫といわれ、コイの中には「二尺もの」とよばれる七十センチ級の大物もザラ。その「引き」は釣り人にとってこたえられないものとか。上浮穴郡久万町畑野川、農業八塚実美さん(六)も常連の一人。「気が落ち着きますぞ」と湖畔の釣りを礼賛。

周囲の山々からはウグイスの鳴き声が聞こえ、湖面を吹き抜ける快い風の中、のんびりと釣り糸を垂れる湖畔の風景がここ当分続く。なお入漁料は八百円。

(昭和54年5月24日)



ウグイスの鳴き声を聞きながら、のんびりと糸を垂れる釣り人(面河村畑野笠方市口で)